

弥生集落の展開

約一万年続いた縄文時代の後、今から約二五〇〇年前に弥生時代が始まります。弥生文化の特徴といえば、水稲農耕、金属器の使用、新しい形の土器（弥生土器）など歴史の授業でもおなじみですが、町内の弥生時代はどのように展開されていたのでしょうか。

縄文時代は、狩猟採集が中心の生活で、人々は小さな集団で移住生活を繰り返していました。町内では竹田遺跡（竹田）が有名ですが、恩原湖周辺や長藤、大神宮原、養野、箱、苦田ダム水没地域など縄文遺跡は比較的の間部に分布しています。土器の出土量から長期間生活が営まれた

様子はありませんが、活発に行動していたことがうかがわれます。

しかし、弥生時代に入ると突然人々の生活の痕跡が少なくなり、町内では沢田遺跡（沢田）や富東谷などで弥生時代前期の土器が見つかっています。いずれも小さな破片が数点出土している程度です。かろうじて人の営みがあったことが証明できるものの、当時の社会を推測するまでには至りません。弥生時代前期の遺跡が少ないのは、町内に限らず美作地域全体の傾向でもあります。このようなことになった背景としては、水稲農耕が普及したことにより定住生活の基本となった弥生

社会において、広い水田と集落を作ることのできる土地を求め、県南部などの広い平野部に移住したのではないかと推測されています。

しかし、弥生時代の中期後半頃（約二、〇〇〇年前）になると、これもまた突然遺跡の数が激増し、弥生時代後期まで至る所で集落が作られています。こうした傾向は、水稲農耕により安定した食料が確保できることになったことで人口が増加したことと、かんがい技術の向上で、山間地域でも水田を作ることが可能となり、人々が移住してきたことが考えられます。

ことがわかります。吉井川上流部は山陽と山陰を結ぶ重要な交通路でもあったことでしょう。

弥生時代の土器は時期や地域によって違いがあり、出土した土器を観察することで遺跡の年代や人々の動きを知ることができるのですが、美作地域の弥生土器を見ると、山陰の特徴を持つ土器が多くみられます。これは山陰との地域間交流が頻繁に行われていたことを意味します。また、弥生時代後期になると山陽と山陰双方の特徴が混じった美作地域独特の土器文化が形成されていきます。平成九年（一九九七）に発掘調査された薬師前遺跡（真加部）は、弥生時代後期末（約一八〇〇年前）の集落遺跡です。ここから出土した土器は山陰の土器の影響を強く受けているのですが、表面がタタキという技法で成形された近畿地方の特徴をもつ甕も出土していることが注目されています。こうした技術がどのような経路でこの地にもたらされたかを考えると、鏡野の弥生人たちは、山陰のみならず様々な地域との交流をもち、影響を受けながら集落を営んできたのかもしれない。

参考：『鏡野町史』『奥津町史』『富村史』『みんなて学ぶふるさと美作のあゆみ』『薬師前遺跡』



弥生時代の資料（鏡野郷土博物館）



土路江遺跡の竪穴住居跡



薬師前遺跡出土土器（鏡野郷土博物館）
（右端の土器が近畿系の甕）

町内では久田堀ノ内遺跡（久田下原）でしか水田の跡は見つかっていませんが、稲の穂を刈り取る「石庖丁」は町内全域で多く見つかっており、至る所で水田をもつ弥生集落が営まれていたことが想像できます。九番丁場遺跡（布原）では、県内でも最大級の直径約一二mに及ぶ竪穴住居跡もあり、香々美川の水利を利用した広大な水田を見下ろす豊かな集落が存在していたようです。また、吉井川上流部では、発掘調査により土路江遺跡（奥津川西）や杉遺跡（杉）で中期後半から後期にかけての住居跡が確認され、上齋原では石庖丁も見つかっていることから、中国山地の最深部にまで人々が生活していた

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話（0868）54-7733